

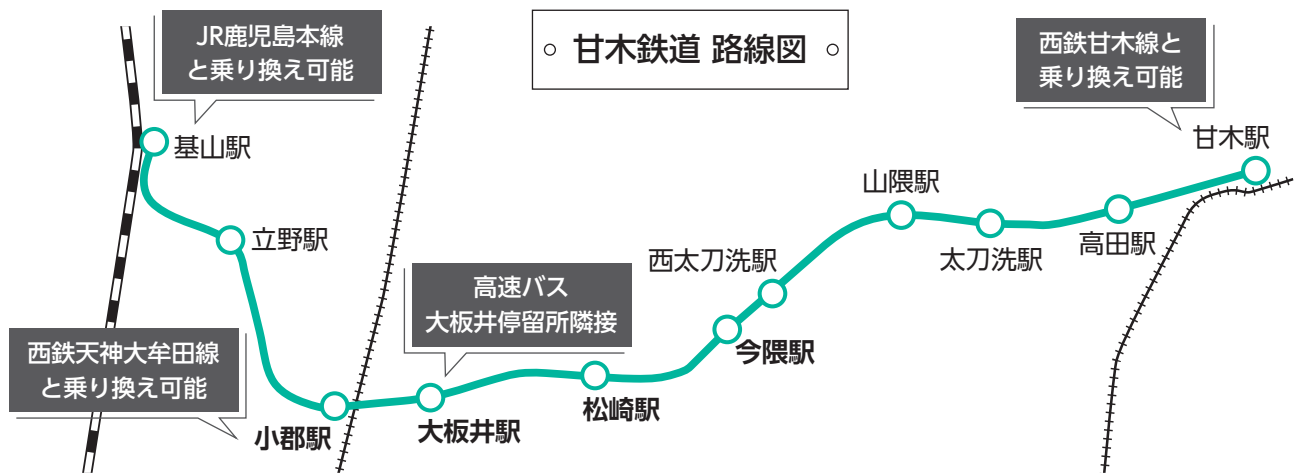
地域とともに走る 甘木鉄道開業40年

全長13・7キロメートルの甘木鉄道は、佐賀県基山町から小郡市、大刀洗町、筑前町を通り朝倉市までを結ぶ路線です。令和6年度の乗客数は140万人以上。沿線地域の生活に欠かせない交通手段として親しまれています。

甘木鉄道の歴史は第二次世界大戦時に遡ります。昭和14年に陸軍大刀洗飛行場の軍需物資輸送用路線として開通。戦後はビール工場の貨物輸送を主として、昭和61年3月まで国鉄甘木線として運行されてきました。

昭和56年、国鉄再建法に基づく赤字ローカル線に選定され、甘木鉄道は廃線の危機を迎えます。しかし、存続を願う沿線自治体や地域住民の行動により、第三セクター方式(国や地方公共団体と民間企業が共同出資する組織による運営)の鉄道会社として生まれ変わり、運行を続けています。

初代の車両は、沿線の景色をワイドに楽しめる広々とした前面・側面の窓が特徴でした。バス車体やバス用部品が用いられた車両で、甘木鉄道が現在でも「レールバス」と呼ばれるのは、この車両に由来しています。



甘木鉄道の40年

昭和61年

国鉄甘木線から第三セクターに

昭和62年

立野駅、大板井駅、山隈駅が開業

平成10年

マスコットキャラクター
「レビット君」誕生



平成14年

今隈駅が開業



平成15年

朝夕の通勤・通学時間帯に
15分間隔の運行開始
大板井駅が高架駅に



現在運行している車両は全部で8車両。それぞれ異なるデザインと明るい色が沿線の自然に鮮やかに映え、周辺地域の風景を作り出しています。これまでも数年に一度、車両の入れ替えが行われてきましたが、老朽化により、令和8年から年に1車両ずつ新型車両に入れ替わることになりました。

3月14日にお披露目された新型車両は、ステンレス製の車体に初代車両を彷彿とさせる2色のラインがデザインされています。エンジンの仕様や車内の座席もリニューアルし、また違った乗り心地を楽しめます。新旧の車両を乗り比べてみるのもいいかもしれません。

はじめまして!

新型車両「ARe501」です

3月14日に行われた出発式には、お披露目された新型車両を見ようと鉄道ファンなどが集まりました。

この日は関係者向けの特別運行。10時58分に甘木駅を出発した列車は約30分かけて基山駅に到着し、折り返して再び甘木駅に戻ってきました。出発を見守ったファンからは、乗車を待ち望む声が聞かれました。

甘木鉄道が支える

くらしとにぎわい

小郡市周辺の公共交通として重要な役割を果たす甘木鉄道。日々の安全運行を支えている、甘木鉄道株式会社専務取締役の大楠隆行さん(写真左)、運輸課助役の原武孝征さん(写真右)に聞きました。

当たり前を支える

——第三セクターの鉄道会社の中でも経営状況が良いとして知られる甘木鉄道。新型コロナウイルスを経て、現在はどのような状況ですか。

大楠 令和6年度は140万人以上にご利用いただき、新型コロナウイルス前の水準にほぼ戻りました。ただ、人件費や資材費、燃料費の高騰で、経営状況は厳しいです。また、鉄道業界全体で人材不足も深刻です。国鉄・JRを経て甘木鉄道で勤めてきた社員が、この数年で何人も退職を迎えます。甘木鉄道では令和2年度から、新卒者を採用して運転士の自社育成を進めています。

——原武さんはその1期生ですね。

原武 はい。幼い頃から両親に連れられて鉄道で各地を旅する中で運転士に憧れ、鉄道科のある専門学校へ進学し、縁あって甘木鉄道に入社しました。半年ほどの研修のあと運転士の国家資格を取得し、



令和5年2月にお色直しした車両「AR307」。原武さんがデザインし、乗客や社員にも好評です。

先輩方に教えてもらいながら運転士デビューしました。初めて運転したとき、普段何気なく乗っている列車を、スムーズに動かして滑らかに停車させることの難しさを痛感しました。

——入社して5年。当時から心境の変化はありましたか。

原武 今では車両ごとの特性も把握し、運転士として積んできた経験を業務につなげられています。それでも、常に意識しているのは「安全を最優先し、当たり前前の空間





沿線に視界を遮るものが少なく、どこまでも広がる空や風景を楽しめるのも甘木鉄道の特徴。桜やコスモスの季節には、写真を撮影して楽しむ鉄道ファンの姿も多く見られます。



小郡駅は平日の始発が5時台、終電が24時前。通勤・通学の時間帯には2両編成の車内がいっぱいになり、ホームには列車を待つ人たちの長い列が。



をつくる」ことです。時間どおりに到着し、安心して乗車でき、無事に目的地に着く。そんな公共交通機関の「当たり前」を支えるため、毎日同じように見える業務でも初心を忘れないよう心がけて乗務しています。

大楠 甘木鉄道は通勤・通学・買い物などで利用する人が多く、地域の鉄道としてなくてはならないものです。平日42往復・土日祝日34往復を事故や遅延なく運行し、安全で利用しやすい甘木鉄道であり続けられるよう努めています。

——乗務する中で、印象に残っていることはありますか。

原武 沿線で子どもたちが列車に向かって手を振ってくれることがあります。私自身も幼いときに列車に手を振っていた記憶があり、

当時の自分を重ねて感慨深くなります。こうした温かいやりとりが、鉄道や運転士の仕事の魅力。将来、鉄道業界を志すことも一人でも増えてくれたらうれしいなと思いつながら、運転に支障がないときは手を振り返しています。

地域密着型の路線として

——地域住民に愛されているなど感じます。

大楠 甘木鉄道の応援団である「甘木鉄道を育てる会」は、七夕・クリスマスなど季節ごとに車両や駅舎を飾りつけたり、こどもの日のイベントを開催したりと活動してくださっています。甘木鉄道としても乗車促進イベントや企画列車な

ど、甘木鉄道に親しんでもらうための工夫を続けています。

今年初の試みとして、車両を貸し切った模擬結婚式も行いました。車両を貸し切って甘木―基山間を往復し、車内や近隣のお寺での写真撮影や、車窓から見える満開の桜などを楽しんでいただきました。今後は沿線の観光地や大規模イベントとも連携して、地域の活性化にさらに貢献していきたいと考えています。

甘木鉄道は多くの方々地域とともにある、地域密着型の路線です。その役割を改めて認識し「利用しやすい鉄道」「親しみやすい鉄道」「魅力ある鉄道」「安全・安心な鉄道」という4つの目標の実現に向けて、これからも走り続けます。

あまてつと、育つ。



きっかけは 甘木鉄道

小山理恵さん・隼世^{はやつく}さん親子との出会いは、令和3年のこと。市の写真コンテストに、雪の降る日の甘木鉄道の写真を応募してくれました。当時、小郡特別支援学校高等部の生徒だった隼世さん。太宰府市から通学バスで通っていましたが、電車でも通えるようにと練習を始めた日、県内は数年に一度の大雪で一面雪景色でした。

「その日は本当に寒く、これから隼世が一人で電車通学するとうい心配もあって、とても遠い道のりに感じました」母の理恵さんは、応募した写真を見ながら振り返ります。「隼世が卒業しても、小郡の風景が好きなので2人でよく訪れています。小郡産の野菜や小郡のお菓子を见かけて、つい買ってしまつことも」

現在、隼世さんは篠栗町の物流会社で働いています。片道1時間半、電車やバスを乗り継いでの通



応募した写真はコンテストで入賞。ポストカードになりました。

勤を決心できたのは、あの大雪の日の経験があるからだと言います。

「甘木鉄道で練習して自信がつき、自分で調べて電車やバスに乗れるようになりました。行動範囲も広がって、関心がある場所に自分から出かけています」そう話す隼世さんの次の目標は、飛行機に乗ること。全国各地で趣味の登山を楽しみたいそうです。

きっかけは甘木鉄道——思い出に浸る2人の笑顔が印象的でした。

駅から未来が広がる

3月のある日、松崎駅で列車を待つていたのは、ベトナム出身の6人の技能実習生。九州国際学院（松崎）で1か月間、入国後講習を受けていると言います。

「今日は休みなので、甘木鉄道に乗ってベトナムの食材を売っている店に買い物に行きます。日本語は難しいので、街中に出る機会があると日本語の練習になってうれしい」そう言って、列車が来るまでの15分間、日本での生活や仕事のことを話してくれました。

1時間後、再び松崎駅に戻ってきた6人の手には、それぞれ小さなレジ袋が。残り10日ほどの講習のあと全国の実習先に戻り、農業や製造業の現場で活躍します。



「初めて小郡に来たときはとても寒かった！でももう慣れました」

顔を上げると

多くの生徒が甘木鉄道で通学する三井高校。車内ではどう過ごしてる？勉強？

「いや、いつもはスマホ見るか音楽聞いている。でも七夕のときは、子どもたちが書いた短冊が車内に飾られているから、ときどき顔を上げて見えています」クリスマスとかの飾りつけの列車を見ると、季節感じますね「この前、大雪のときにホームで雪だるま作ったたら、3日ぐらい残ってて。しかも誰かが目とか口とか付け加えてくれて、どんどん増えてるんですよ」

甘木鉄道は日常の一部だと話す3人。もしかして、帰りの時刻表とか覚えてたり？
「16時台は14分・34分・52分！」



甘木鉄道で通学するのも、あと1年。

あまてつを、支える。

ゆるやかに、甘木鉄道と

松崎駅で列車を降りると、小さな花壇が迎えます。手入れをしているのは市民有志による団体「松崎花壇部」。18人のメンバーが月1回集まり、草取りや植え替えをしています。

毎日散歩で松崎駅前を通っていたという松尾寛さんは、テレビで活動を知って興味を持ち参加しました。現役時代は仕事の都合で転勤ばかり。30年ほど前、交通の便が良いところに惹かれて小郡市に移住し、今では第2のふるさとのように感じています。

「駅は仕事や学校から戻ってきたり、離れて暮らす人が帰省したりするときに降り立つ、ふるさとの玄関口のような場所。少しでも明るくほっとした気持ちになってもえたら」

以前は地域の団体が管理していたものの、高齢化で中断。花壇には草が生い茂り、黒いシートで覆われていま



この日は7人が参加。前列右が松尾さん、前列左が宮原さん。

した。8年前に代表の宮原夕起子さんが中心となって活動を始めた。現在は季節の花が彩り、中央の黒板にはメッセージやイラストが描かれています。

「作業中に声を掛けられることも増えました。メンバーには花壇部で地域活動デビューしたという人もいて、地域のつながりの場にもなっています。無理せずゆるやかに、甘木鉄道と一緒に小郡の風景を作っていけたら」

おだやかに話す宮原さんの周りに、育みの輪が広がります。

親戚みたいな気持ちで

小郡駅のホームからは、市が運営する小郡駅前高架下駐輪場が見えます。700台近くの自転車・バイクなどを無料で止められます。

早朝から続々とやって来る利用者を誘導するのは、管理会社の5人。清掃や自転車の整理など駐輪場の維持管理を行う中で、たくさん利用者と出会い、見送ってきました。「甘木鉄道に乗り換える人は、沿線の高校生や工場で働く人が多いかな。通勤や通学の人は、ほぼ毎日顔を合わせるでしょ。あいさつだけの日もあれば、雑談を交わすこともある。就職が決まったと教えてくれて一緒に喜んだり、志望大学に落ちたという高校生を励ましたりしたこともあるね。親戚みたいな気持ちだよ」

朝10時を過ぎて出入りが落ち着いた駐輪場には、びしっと一直線に自転車



ベテランになると、利用者それぞれの自転車を覚えているそう。

びます。「みんなきちんとルールを守って止めてくれる。でも時には急ぐこともあるから『あとは並べとくけん行ってこんね。気をつけて』と送り出すこともあるよ。『ミニニケーションやね』

安全に、そして快適に。よい1日になることを願って、今日も駅に向かう人たちを見守ります。

